

# 何にものか是れ宗教

(承前)

加藤 玄智

其點から申せば斯う云ふことに依つて宗教の經驗が明かになると思ひます。これは佛教のお經の中にありますので、或る非常に暑い日に曠野を旅行して居る人があつて、段々歩いて居る内に咽喉が渴いて渴いて仕様がなくなつて、何處かに水はないかと思つて探して居ると其處に一つの古井戸を發見した。覗いて見ると如何にも冷たさうな水が湧き出してをる、若し此水を飲んだならば必ず渴を癒やすであらうと思つたが、遺憾ながら其處に水を汲む可きところの釣瓶も何も無い。斯くこの井水を飲んだら必ず自分の渴を癒やして助かるだらうと云ふことの分つた時の心の状態は是れ即ち哲學です。宇宙の絶對とか本體と云ふやうな理窮を研究して、論理的に之を不可知的とか、或はシヨールペンハウエルの言つたやうな宇宙の意志との云ふことを口にして居るのは、丁度この井戸の水を飲んだら必ず渴を癒やすだらうと其見たところの状態である。それから水を確に釣瓶によつて汲んで一掬ひ味はつた、ア、是れで助かつたと云ふ氣になつた心の状態が宗教である。それを私は神人の關係の實意識であると云ふのです。禪宗に於て「冷暖自知」といふことを説くのも全く是れであると思ふのであります。唯

々冷いとか暖いとか云ふことを人から聞いても分るものではない、冷暖自知しなければならぬと云ふのは其處にあると思ふ。それであるから宗教は實際活きて居る精神現象である、即ち感情とか意志とか云ふものが働いて現れる事實である。之に反して哲學は唯其井水を飲んだら善からうと云ふことを知つた時の有様である。斯う云ふ方面から觀ると哲學と宗教の區別も付くと思ふ。これは獨り私が勝手に言ふばかりではない。例へば耶蘇の弟子のボウロ既に之を言つて居る。「我は神と共に働き、生き、さうして在る」と。又耶蘇は「神と共に働く吾等は非常に幸である」と言ふてをる。「神と共に働く」といふ意識が即ち宗教の大切な處である、神人の共存の關係である。我は一人で居るけれども何ぞ知らん二人だ一人ではない即ち神と共に居るのだ、斯う云ふのが即ち宗教といはれる特色の出づる處であると思ふ。それは全く基督教と性質の違つた佛教でもさう言へるのである。例へば親鸞聖人などは「煩惱に眼さへられて、攝取の光明見ざれども、大悲倦きことなくて、常に我身を照らす」と云つて居られる。自分は煩惱の眼で本當に見えぬけれども何ぞ知らん大悲の光明は始終自分を照らして居る、斯う云ふのでありますから、佛の光明の中に住まつて居ると云ふことになる。之を或は「攝取心光常照護」とも云はれて居る。其點から言へば墨住教と云ふやうなものも同一の經驗を有つて居つて、

天照神の御腹に住む人は

ねてもさめても面白哉

かう云つて居る。是れは天照大神を本尊にして居るから天照神の御腹の中に住むと云つたので、ポウロのとは言葉は違ふけれども同じ精神状態であります。天照らす神の御腹に住む人はねてもさめても面白哉。これが矢張宗教の意識であると思ひます。即ち神と共に居るとか神と融合歸一するとか云ふ精神状態がよく現れて居るからであります。

さう云ふ風でありますから、これはモハメッド教に就いても言へるのであつて、モハメッドと云ふ人は御承知の通り非常に宗教戦争をやつた人で、或時は非常に負けまして、丁度源頼朝が石橋山の戦争で負けて真鶴の方に逃げて行つて大きな木の洞に隠れて居つた様に、モハメッドはタウルと云ふ洞窟の内に這入て従者のアブベクルと一緒にそこに居つた。時にアブベクルが曰ふには、只だ二人でいかに危険である、敵がドン／＼窮追して来るから怖いと云つて顛えて居ると、モハメッドが、汝何ぞ我等二人と云ふや、我とお前の外に第三者がある、第三者とは即ち神であると言つた。モハメッドと云ふ様な一つの宗教を開いた人には矢張神と共に居るといふ意識があつたのであります。それは又モハメッド教とは非常に時代の違ひ又處も違ふ印度の宗教にも見えて居る。例へば佛教以前に婆羅門教があり婆羅門教以前に吠陀教があつたのであります。その吠陀教のお經を讀みますと、ヅルナと云ふ神様があつて、此ヅルナのことを吠陀を書いた詩人は何と歌つたかと云ふと、悪い奴が二人をつて、誰も見ないから悪い事をしやうと、何ぞ知らんヅルナの神が天で見て居るではないかと言つて戒

めて居る。それが神人の共在俱存の精神状態であると思ふ。それはバイブルの方で言ひますれば舊約全書の中の詩篇の語に其精神状態が最もよく表はれて居ります。

我いづこにゆきてなんぢの聖靈をはなれんや、われいづこに往てなんぢの前をのがれんや。われ天にのぼるとも汝かしこにいまし、われわが榻を陰府にまうくるとも視よなんぢ彼處にいます。

天に上らうが地獄へ行かうが神と共に居ると、斯う云ふことをバイブルとは時代も違ひ國も違つた處に於ても歌つて神を讚美して居る。これが即ち宗教的意識と呼ばれる所のものであると思ふのであります。

それから先程申しました豫言者のことではありますが、豫言者は宗教的天才であつて、始終神と共に居ると云ふ意識があつたのであります。全體豫言者といふ語の原意がそれを示して居る。豫言者といふと日本では何か未來の事を豫言して、來年は大地震があるとかいふやうなことを言ふのを豫言者と思つて居るけれども、イスラエルの豫言者は然うでない。豫言者は希伯來語でナービー *Nabi* と申します。ナービーと云ふのは簡單に申せば「神の口になる者」といふので、つまり神の代言人です。人間であるけれども其時だけは神が乗移つて之に物を言はせるので、自分が言ふのではない、神に言はせられたる所のもの、斯う云ふ意味であります。それであるから豫言をするときには自分が言ふのではない、神が乗移つて言ふのである。神が乗移るから神と一緒になつてしまふので、やはり神人の融合

同化と云つてもよい。それが宗教的天才であるから、何うしても神と共に居る神と一になると云ふことが宗教に一番大切な特色を現して居りはせぬかと思ふ。日本で神懸と云ふことがございしますが、神懸といふのは矢張神が懸かつて来るので即ち神と一緒になることです。即ち豫言者と云ふものは神懸の状態になつた人である。また豫言者の宗教と云ふやうな進んだ宗教でなくても、例へば滿州蒙古の地方に、非常に行はれて居る所のシアマン教と云ふのがあります。シアマン教と云ふのはシアマンと云ふ一種の坊主に神が乗移つていろくのことを言はせるので、支那人は其シアマンのことを跳神と申して居ります。人間だけれども其時だけは神が乗移つて跳る所の者と云ふので跳神と云ひます、是れは非常に面白いと思ふ。

そこで又非常に面白いことが起つて来るのであります。宗教といへば直ぐ佛像と云ふやうなものを聯想して、あゝいふものでもなければ宗教でないやうに思はれますけれども、何ぞ知らん宗教的天才である豫言者が偶像禮拜を非常に禁じて居る。これが亦非常に面白い現象であります。其性質を遺傳して基督教が他の宗教を偶像教と云つて無暗に罵倒して居るのであります。其善惡及び其ことが正しいか正しくないかは今論じませぬが、兎に角なせ豫言者といふ宗教的天才でありながら普通の人が宗教上大切あると思つて居る所偶像を要らぬと言つたか、要らぬと言ふのみならず、害が有ると言つて之を禁じやうとして居つたか、斯う云ふ面白い問題が出るのであります。それは私共の云ふ神人

の共在俱存の精神状態から言へば明瞭に説けるのであります。なせならば、神と共に居つて、神と面接して話をする豫言者であるから時としては神と一緒にいる。それ程の活きた信仰のある豫言者であるから何を苦んで神の寫であるところの偶像を持つて来る蛇足を添へんやである。若し吾々が生きた友人と共に居つて互に交際して居るときには其友の寫眞は別に欲しくない。けれども一たび其友人が死んでしまつて最早其友人に會はうとしても會へぬ、談話を交換しやうとしても其れが出来ぬと云ふ云ふ時になると、初めて其友人の寫眞を床に飾つて之に御供物を捧げる氣になる。友人が遠くなつて初めて寫眞が必要である。神と共に居ると云ふ意識のある間は神の寫眞に外ならぬ所の偶像は必しも要を見ない。斯う考へるといふと神と感應道交して居つた豫言者が偶像禮拜を禁じたのは尤もであると私は思ふ。

それは佛教に就いても同じことが言へるのであります。成程日本の佛教などは随分偶像を禮拜して、真宗の如きは親鸞聖人の像を祭り、又眞言宗の如きは何でもござれで掃溜の様にいろ／＼祭つて居て、世間から、多神教だの偶像だのと云はれて居りますが、いかに初めて見た時はさう見えるでありませんが、釋迦自身の宗教に偶像の無かつたことは餘程面白い現象であります。印度に佛像の發達したのは希臘あたりの美術が這入つてから其影響で段々發達したのであつて、決して釋迦は偶像に向つて禮拜などをして居らない。元來婆羅門教に於ては梵天を大切なものとして梵天と融合同化することが

即ち婆羅門教の目的として居つた所でありませんが、其梵天と全然融合同化の出來たのが即ち釋迦であります。つまり自分自身が神であるから何を苦んで他に又神の像を作らんやである。さういふ譯であるからして釋迦は決して偶像を拜んで居らなかつた。これは宗教史上餘程愉快な現象であるのです。

さういふ風で、宗教上の非偶像主義がやはり宗教を以て神と人間の共在俱存であるとか、その兩者の融合同化と云ふ考から説けば非常に能く説けるのでありますが、尙爰に私は此等の點を明かにします爲めにも少し幼稚な宗教に就いてお話しして見たいと思ひます。即ちアイヌの熊祭などについても同じことになるのであります。御承知の方もありませうが、アイヌは熊祭と云ふことをする。あれは私共宗教者の方から申すと一種のトーテム崇拜と云ふものです。トーテム崇拜と云ふのは亞米利加印度人の間に行はれて居る宗教でありまして、それは何う云ふのかと云ふと、トーテムとは一種の動物を云ふので、これは亞米利加印度人の言葉であつて西洋語に翻譯が出來ないので只トーテム崇拜と呼んで居るのでありますが、或動物が自分の先祖であつて同時に神であると謂ふ譯です。即ち茲に狼なら狼があれば、或アメリカ印度人の種族は自分の先祖があつた狼から出たものであると考へ、その結果之を大切にして滅多に殺してならぬと云ふやうな信仰を有つてをる。動物崇拜と祖先崇拜と結付いたものがトーテム崇拜である。アイヌの宗教に就きましたは英吉利の宣教師のバチエラーと云ふ人が殆ど三十年も研究しまして、其爲めに専門學者となつて學位まで貰つて居りますが、此學者の研究に依り

ますと、アイヌの熊祭は矢張一種のトーテム崇拜であると云ふのであります。と云ふのは、アイヌが熊祭をするに就いては、先づ山へ行つて熊の子を捉まへて来て、さうしてアイヌの女が自分の乳で之を育て、相當に大きくなつた所で殺して熊祭をする。其祭ると云ふのは天地の神を祭るのである。熊のこどもをカムイ神と云つて、彼等の信仰に於ては熊は矢張り神である。即ち一方から言へば神である所の熊を殺して、さうして其肉を天地の神に供へ同時に其處に集まつた信者が食べる。是れは何う云ふことを意味するかといふと、宗教は神と人間の接觸同交或は融合歸一を云ふのであるから、神の肉が信者の腹中に這入つてしまへば是程神人の接觸同交はない、物質的接觸同交の最もよく出来たものである。斯う云ふ意味からして、平生は一般にトーテムたる動物を殺さないのだがアイヌの場合は特別に祭をするのだから熊を殺して食べるのである。神を殺すといふことは大變おかしい様であるけれども、これは野蠻人の宗教にはよく有ることです。例へば或野蠻人の如きは其會長を神の顯現と考へて居る。人間を犠牲として之に供へる位であるから神として居る。所が妙な迷信があつて、其神の顯現である會長が天壽を以て終はると、つまり神の生命がなくなつた譯でもう神が世に無くなつて仕舞ふことになる、斯う云ふ考からまた本當の壽命のつきない内に會長を殺してしまふ、即ち會長になつたが最後一定の年齢に達すれば殺されてしまふ。さういふ奇習がある。であるから神を殺すと云ふことは彼等の社會に於てはなかく意味がある。トーテム崇拜の場合の神である動物を殺すといふのも

深い意味が含まれて居るのです。兎に角唯今申しました様に神の肉を食べば最もよく神と接觸同交が出来ると云ふ所から熊祭などは行はれるものと思ひます。又發達した宗教にも其形は遺つて居りまして、基督教に於ける聖晚餐式の如きは其れであります。唯々發達階級の高下があるだけで原則は同じである。即ち聖晚餐式に於ては信者間に葡萄酒と麵麩を分けて是れは神の血である是れは神の肉であると云つて飲んだり食つたりする。つまり今まで葡萄酒であつたもの麵麩であつたものも其信仰を以て食へばそれが基督の血になり肉になると云ふのでありますが、やはり神の子である基督の血と肉とが信者の腹の中に這入れば是れ程の神人同交はないのであつて此處に宗教の宗教たる處が現れて來るから斯様なことをするのです。これもアイヌの熊祭と其根本的精神は同じであると思ひます。

それが最も淫猥な方面に發達したのは Holy prostitution と云ふ現象である。是れは小亞細亞邊りに行はれて居るのでありますが、其處にアスタルテと云ふ女神が崇拜されてある。大變淫猥な宗教的儀式と結付いた神様でありまして、其祭は大抵森林中で行はれるのであります、その森へ若い女などが出掛けて行つて其處で一夜を明かす、而してアスタルテに仕へて居る所の坊さんが來て其等の女を犯してしまふ。さうすると其坊さんを矢張神様の現れと彼等は信じて居るので、之に由りて信者の女は神と接觸同交することが出来たとして非常に喜ぶのです。此等は矢張神人の接觸同交といふ宗教の精神が妙な性的方面に現れたのであります。それから喇嘛教に於てはなせあゝいふ妙な男女交合の佛

像などを崇めるかと云ふと之も矢張此處から來て居るのであります。即ち宗教の本性は神人の接觸同交に在るが、その接觸同交は聖晚餐式のやうに葡萄酒と麴麩でも出來ませうし、又は印度の神秘的な行者がやる様に所謂樹下石上で坐禪觀念してやることも出來るでありませうし、いろ／＼ありますけれども、それが流れ／＼して妙な風に現れて、男女の接觸同交と云ふことを標準にして神との接觸同交を考へて來た、それで斯様な偶像が出來るやうになつたのでありますけれども、さういふ風で、何うしても神人の接觸同交と云ふか融合歸一と云ふか、其れが各宗教に通じた根本的の大切な點であると思ふのであります。それが例へば先程申した眞宗の如きに於きまゝては攝取心光常照護で、佛の光明の中に照らされて自分は大悲の光明中に住んで居る、斯う云ふ美しい倫理の方面とも衝突しない觀念になつて現れる。或は加持祈禱と云ふ。眞言宗などの加持祈禱と云ふと如何にも迷信の様であるけれども、何ぞ知らん之には非常に宗教的意味がある。弘法大師は即身成佛義と云ふ書物の中に、  
加持者、表如來大悲與衆生信心、佛日之影現衆生心水曰加、行者心水能感佛日名持  
と云つて居る。佛の精神が衆生の心の水の上に映るのを加と曰ひ、衆生の精神が佛の大悲に感應するのを持と曰ふ。斯う云つて説明して居る。加持の二字に於ても神人の共在俱存と云ふか融合同交と云ふか其れが最もよく表はされて居る。さすが眞言宗であつて弘法大師は斯の如き宗教的經驗に富んで居られるのである。

上來私は主として吾々の言葉で申す他力教と云ふ側に就いてお話致した、即ち衆生と佛——吾々人間と、神とか佛とか云ふものゝ關係に就いてお話致しましたが、それでは禪宗のやうな一種の佛教があるが是れは何う云ふ點で神人同交と言へるか、斯う云ふ問題が起ると思ひます。禪宗では「釋迦何人ぞ我何人ぞ」と云ふて、佛様も叱り付け達磨大師も叱り付けると云ふやうな豪い調子である、所謂「天上天下唯我獨尊」とは是れで、さうすると何處に神と人との融合同交とか共在俱存とか云ふことがあるだらうか、斯う云ふ議論が起ると思ふ。けれども、成程禪宗は一方から言ひますと、佛何人ぞ我何人ぞ、直指人心見性生成佛、此心即ち佛であると云ふやうなことを言つて、外部に佛を認めないやうに見えるのでありますが、併し禪宗も亦宗教である、やはり私の申した神人の融合同交とか又その共在俱存の感じを有つて居る。禪林類聚と云ふ書物を見ますと傳大士と云ふ人が斯う云ふ偈を讀んで居る。これで見ると明かに神人の融合同交といふことを禪宗の方面からも言へると思ふ。

夜々抱佛眠、朝々還共起、起坐鎮相隨、語默同居止、

纖毫不相離、如身影相似、欲識佛去處、祇這語聲是、

度々佛を抱いて眠る、毎朝共に之れ起る——眠るにも起るにも佛と共に居る。起坐鎮に相隨ふ——起つても坐るも佛と一緒にする。語黙同じく居止す——話をするときも黙つて居るときも佛と共に居る。纖毫も相離れず——是れ即ち神人の融合同交或は共在俱存である。身影の如くに相似たり——身體に

影の随ふが如くである。佛の去處を識らんと欲せば——佛が何處に行つしまつたかを識らうと思へば、祇這語聲たごご是れなりで、要するに眠るにも起るにも、起つにも坐るにも悉く佛と共に居るといふことを云つたのでありまして、神人の共在俱存の感じがこゝにも明かに現れて居ると思ひます。

此點は諸所に現はれてをるので、諸君は碧巖錄の講義を御聽きになつたらうと思ひますが、有名な梁武帝と達磨の問答に於てもよく見はれて居ると思ふ。達磨が支那に布教しやうと思つてわざ／＼やつて來た。さうして武帝に會つていろ／＼法を説かうと思つたのであるけれども、武帝はあゝいふ人で、甚だ不得要領である。そこで達磨は武帝を以て迎も語るに足らぬ人物と云ふことを悟つて、そこを去つて楊子江を渡つて少林寺といふ寺に入つて面壁九年をやつた。所が、一方梁武帝は始終宮廷の出入して居つたところの偉い高僧に向つて一日曰はるゝに、達磨と云ふ坊主が來たけれども一向要領を得ない奴だ、己れが隨分寺を建てたり僧を供養するから非常に徳が有ることだらうと言つたら、其れは無功德だと答へた、飛んでもない坊主がやつて來たものだ、斯う言つて話をした所が、其高僧が何と言つたかといふと、それは大變な間違だ、あれは觀音大士の化現でありますと申した。即ち武帝は常に觀音の信仰が深かつたから其れを利用して、あなたが始終信じて居られる觀音の化現でありますと、斯う言つたから武帝は非常に驚いて、それは大變だ、それでは速く行つて達磨を迎へて來いと云ふので、早速使者を走せて迎ひに遣つた。迎ひに遣つたけれども無論達磨は歸らない。そこで其

高僧が更に曰ふのに、これは使者どころではない、梁の全國民が達磨を迎へやうとしても達磨は歸りませぬと。益々武帝は弱つてしまつた。それは大變なことになつたと云つて非常に悔んで居られると、其高僧が更に何と曰つたかといふと、これは御承知の通り碧巖録の初に出て居りますが、斯う云ふことを曰つて居ります。

千古萬古空相憶。休相憶。清風匝地有何極。

と。ア、悪いことをしたと言つてクヨクヨして居るが、悔やまんでもよい、達磨が去つてしまつたと思ふと間違ひであつて、清風匝地有何極——清風滿地じや、水澄潭に在り月天に在り、江山風月常主無く、閑者即是れ主人で、達磨は此處に居るではないかと、斯う梁の武帝に一本きめこんだのが其れであります。俗見を以てすれば達磨は去つてしまつた様であるけれども、宗教的眼光を以て觀れば然うでない、觀音大士の化現の達磨であるから佛教の語で言へば十方法界に充滿して居る、大なる宇宙の實在である一たび悟つた眼で觀るならば清風匝地有何極で、達磨は此處に居るのである。斯う云ふ問答でありますが、その問答法は禪宗です。それは禪宗であるけれども茲にやはり人間と神との關係と云ふ宗教の特色が極めて明瞭に出て居るので禪宗も亦宗教であると思ふのであります。之を千載和歌に耀空上人と云ふ人が、

彌陀たのむ心の中に隔なき

佛はさらに身をも離れず

とよんでをる。「天照神の御腹に住む人はねてもさめても面白哉」と黒住が云つた其神人同交の意識がやはり爰にも現れて居る。であるから私は何うしても宗教は神と人間との一種の關係であると思ふ。其一種の關係は何う云ふ關係かと云ふならば、神人の共在俱存である。或は神人の接觸同交又は融合歸一と云ふてもよい。さうして此接觸同交を圖る手段として祈禱も起つて來ますれば宗教上の色々の儀式も起つて來るのであります。熊祭の如きも亦神人の接觸同交を圖りたい精神から起つたものである。斯う云ふ風で宗教上の色々の儀式の起りと云ふこともお分りであらうと思ひます。

今晚は時間がないから成可く略しまして宗教上の本尊たる神と云ふことに就いては餘り申さなかつたのであります、けれども、段々話して居ります中に、或は幼稚なるアイヌの宗教の話も出ますし、或は進んだ基督教の話も出ました。或は佛教に現れた神——佛教の場合には印度が知的であるために佛と云つて居るので、之も神でありますが則ち佛教の所謂佛のやうなものもたゞ神と云ふ大きな言葉の中に包んでお話したので、ゴッドも這入れば、アイヌのカムイ即神も這入つて居るのであります。故に私共の爰で謂ふ神といふ概念は極めて廣いのであります。してさう云ふものと人間との接觸同交といふか共在俱存といふか、融合歸一と云ふか、其れが宗教の最も大切な處であつて、是れが有れば宗教と云ふことが出来るのであります。丁度學校の徽章を附けて居れば何處其處の學生といはれる

様に神人の融合同交或は共在俱存と云ふことが總ての宗教に共通であるから之を以て考へるのが一番宗教の特色を擲んだものであると私は考へるのであります。で、宗教學者は斯ういふ方面から宗教を考へてをる。して此歸納的研究に依つて宗教の概念を決めまして、然る後に神道は宗教であるか何うか、神社は宗教であるか何うか、又は孔子の教は宗教であるか何うかといふことを考へて行く可きで、さうすると餘程其等の事を論じます際にも議論が埒りはしないかと思ひます。然うでないに甲の人は只基督教なら基督教だけに就いて宗教だと思ひ、乙の人は佛教だけに就いて宗教だと思つて其處には矢張世界にどれだけの宗教があるかといふことを調べて、今申した一切の宗教の共通點であるその大切なる處を擲んでさうして他の現象と之を比較して初めて宗教の何たるやも決められるのではないかと思ひます。私共は宗教を斯くの如くにして觀るといふことをお話致しましたならば、其等の事に心を用ひてお出でになる御方の多少御參考にならうかと思ひまして、甚だ未熟な考でありますけれども一應申上げた次第であります。勿論是れには色々議論のあることでありますから又いろいろ違つた御考もあらうと思ひます。其等もまた謹んで拜聴いたしましたして自分の足らぬ處を補ひたいと思ひます。あまり時間が切迫致しますから私は是れで御免を蒙ります(完)

◎新著紹介(三)

○土田求真居士著 淨土教偈和讃

淨土教の經偈の文意を和讃の體に譯述したもにて、上欄に經偈

原文を掲げて、本文の出所を明らかに書せり。尙、卷末に原略説と字義略解とを附したるは、専門家ならざる求道者に取りては、至極便利なりといふべし。定價並銀五十四錢特製六十五錢(發行所東京芝區露月町一八鴻盟社)

○乃木大將の面影

乃木大將に親炙せる塚田大佐、小笠原子爵、河合中將の所感を收む、蓋し社會風教の

肅清に資せんとする目的を以て、同社が市内の小學校等に大將忠死の五年祭の式日を以て頒布せるものなり。(乃木會編。非賣品)

○小野玄妙著 佛教之美術及歴史

本書は著者が平生の心血を凝ぎたる研究結果を一括せる實に千二

百頁に亘る大著にして印度、西藏、支那、日本等に於ける現存の佛教美術に關し其發達の歷程を委曲明細に論述したるものなれば此方面に興味を有する士には此上もなき良參考書たるべきを信ず。定價五圓(發行所東京市小石川

區林二〇佛書研究會)